を論じ養氣は主として意情の方面よりこれを論ぜりこれ人の心に智情意の三作用あるを看破せゑによれるものなり換言せば知言養氣の說は心的作用を修心の工夫に應用せるものにして近世ヘルバルト派敎育學に於て主張する德の修養と殆んど相似たるは奇と云ふべきなり、

今や孟子逝きてより殆んど四千年浩然の氣は徒らに人口に膾炙するのみにしてこれが眞意を知らんと欲するもの鮮少なるのみならず動もすれば放逸邪肆以てこれを養ひ得べしとなすものあるは孟子を誣ゆるの甚しきものなり浩然之氣豈に如此淺薄野鄙なるものならんや孟子の賢を以てするも猶四十歲を要せゑにあらずや、況んや孟子たらざるものに於てをや嗚呼淵源遠くして末流愈々濁る孟子をして此世にあらしめば果して何とか評すべき、道心を磨き鐵心を鍊り正義を行はんと欲せば孟子の言豈に多少の効なしとせんや、豈に多少の効なしとせんや、

安心立命につきて私見を述べ以て某氏の行を送る

溪川學人

友人某、事によりて我校を去らんとす、予、君と相知る日甚深きにあらずと雖、男子の交道豈に輕からんや。しかのみならず、由來邦家の事、容易ならず、一たび別れては、又いつの時にか逢ふべき。聊蕪辭を綴りて、送別の詞とせん。性もと偏僻、論亦必中を得ざるべし。只區々の心を致さんと欲するのみ。「私かに思ふ、かの運命といふものは活きたるものにて、定まりて移らざるものにあらず、生々の氣須臾もやまざるものなり。人偶々非運に遇へば、安心立命といひて安んずるか、果ては、いつしか降服

し、屈從し、當年の意氣は全く耄碌を、而も樂天自ら得たりとなし、肥遯自ら快うし、世も亦是を容れて。高士と稱す。されど是一を知りて二を知らざるものなり。かの自暴自棄といふは、此運命と爭うて自殺したるものなれば、寧ろ憐むべきと雖、女々しくも降服したるものは、恥しさの極みにあらずや。志あるもの、なぜてか人の臣妾となりて、徒に百年の生を願ふべき、たゞ力爭をてこの忠心を致さんのみ。

されど、兵の道は、神明變化にして、其用ふるに至りては、倏として往き、忽ちをて來り、獨り專らにをて制すべからず、唯必克といふことを心すべきのみ。是を以て、或は、是を未生に理めんとし、或は、是を無形に制せんとす。されば、戰は目前にあらずして、目前にあり、戰うて戰はざるは、是上戰の與に戰ふことなきが如く、しかも機勢は已に充實して、彼我の間、神靈流通す、是を物に譬ふれば、蕾綻びて香郁々、花光春天に滿ちて、一年の最和樂なるが如く、決して一風のそよぎをも、一雨のさわぎをも容るべからざるなり。吾人竹刀を執りて相擊つとき、其相擊つは、已に其氣孰か動いて消長生じ、其間平を得ざるものあるに由る。かの、物、平を得されば鳴るといふも、移して以て此心を說くべきなり。固より其消長は、たゞ毫末のみなりと雖、實に存亡の關はるところ、生死の由るところ、愼みて愼まざるべけんや。抑、勢は敵家の動きに因るものにして、機を察し、利に乘じ、上々下々、常に其先先を制し、以て運命の公轉を造成し、其地步の生動新進を致すべきなり。而して吾所謂安心立命の本意は、實にこゝにありて、運命と共に始終生々し、活動止まざるものなり。

今君は兩陣の間、變生じ、勢動き、奇正將に起らんとする陣頭に立てり。知らず、先づ腹を割いて死せんとするか。胃を脫いで軍門に降らんとするか。はた又軍鋒を轉じ、虛を衝き、先を他に制せんとする

か。唯張瞻明目して、君が前途を待たんのみ。別に臨みて、感慨極りなく、筆尚至らざる處あり。別紙一篇の歌賦も亦實に此の如し。願くは察せよ。明治三十年十一月十八日某、頓首再拜。

雜錄

在伯林人類學博物館案內

鳴門漁長譯

該人類學博物館は政府の設計にして千八百八十年に起工ゑ仝八十六年の終に成功を告げ仝年十二月十八日より開館せり其陳列せる標品は人種學上に關するものと普國及他邦の歷史以前及歷史初代に關するものとの二種に大別せられたり

人種學の部には地中海沿岸諸國の古代人民に關する禮拜具家具戰器獵具漁具農具工具衣服及裝飾等の見本及紀念碑等ありて之れに因る時は古代より近代に至る人民發達の程度及聯續等知ることを得べし其第一室には自然のまゝなる人民の生產物あり又印度及附近諸國の自然に暢發せし文明を示すべきものあり又東方亞細亞古代亞米利加の文明の有樣あり歐州に關ゑては古世紀より今日に至るまて保存せられたる遺物及進化の度に從ひ人民の所有せゑ固有の鑄貨あり

歷史前及歷史初代に關する標品中には耶蘇敎か社界を感化するに至りし迄及完全なる歷史時代の初端に至る迄の紀念碑及遺物等を包括せられたり

下室に至れば歷史前の古物及スリーマン人の標本あり此室の上なる第一階の室には亞弗利加澳洲及亞米利加の標本第二階の室には印度及東方亞細亞の標本あり